

#### ア 職員の専門性の向上

法人での在職年数、ウィズでの在籍年数ともに浅い職員が多い。また、他の事業所にはない就労支援事業や障害者の特性の理解など学ぶことは多い。法人内研修に積極的に参加し、職場内研修の質の向上も職員の専門性の向上には不可欠である。就業支援、カウンセリング、強度行動障害支援等の外部の研修会へも積極的に参加させた。

#### イ やる気のある人材の育成

職員は経験年数は長くはないが、意欲的に取り組んでいる。一人一人長所・短所はあるが、熱心に取り組んでいることに対して、面談等を通して適切な助言に心がけている。新規採用職員へは、日頃の仕事を通して、社会人として、福祉施設の職員としての心構え等を機会あるごとに助言している。資格取得にも熱心であり、やる気も十分であるので、人事考課の結果を活かし、支援スキルや意欲のさらなる向上に向けて育成を図っていききたい。今年度からエルダー制度を採り入れ、新人の育成を図るとともに、事業所内新人研修を適宜実施し、職員の育成を図った。

### (3) 地域のニーズに即応した施設運営・ネットワークで結ぶ福祉サービス

#### ア 幅広いニーズに対応した多様な事業展開

レストラン部門においては、通常の「ホクレア」「プメハナ」のレストランの業務に加え、参加依頼のあった各種イベントにおいて、パンや菓子類の積極的な販売を行っているが、今年度はコロナ感染予防のため各種行事が中止となった。レストランでは、テイクアウトの弁当販売を行っている。今後、ポストコロナの事業を検討していききたい。

#### イ 新たなる拠点づくりと事業の展開と非常時の対応

地域の拠点づくりのためには、ウィズの存在について知ってもらうことが必要である。地域のイベントや行事等へ積極的に参加し、施設を地域の研修の場として提供するなど、地域の拠り所となる施設となるように取り組んでいきたい。また、自然災害等の非常事態に備え、非常食等の備蓄にも取り組んできた。

### 3 事業所が重点的に取り組んだこと

今年度重点的に取り組んだことは次の5点である。

- (1) 開設10年目を迎えたウィズの最大の課題は収支のバランスを考えた安定的運営である。新規利用者を獲得して稼働率を上げ福祉収入を増やすことである。特別支援学校の産業現場実習や施設見学者、大学の福祉体験実習等の受け入れを行った。また、中途利用希望者も積極的に受け入れ、受け入れ学校の担当教諭や保護者へウィズの取組を説明し、卒業後の利用に向けてアプローチを行った。その結果、令和2年度は8名の利用者を獲得することができた。また、定員も4名増やし計39名とした。
- (2) コロナ禍で感染による事業所の閉鎖を防ぐために、予防対策を徹底するとともに、4月から在宅支援を行い、利用者が安心して利用できる対策を実施した。それにより、福祉収入も確保することができた。その他レストランの営業も創意工夫して感染を予防しながら事業を進めることができた。
- (3) ウィズは、利用者の約5割がグループホームを利用している。支援会議や調整会議、合同主任会が行われる際に、情報を共有し、連携を深め支援の充実を図った。
- (4) 保護者研修会を今年も実施する予定であったが、コロナウイルスの流行で中止した。他の研修会等はオンラインで実施することができたので、インターネットのICT技術を活用した情報交換を計画していききたい。
- (5) 今年度はエルダー制度を採り入れて新人職員の育成に努めた。全職員によるOJTも取り入れながら新人育成を図るとともに、事業所研修と事業所内新人研修も実施した。また外部研修への積極的な参加を図り、一人一人の力量を高めるとともに職員の意識改革と意欲の向上を図った。行事の見直しと改善、利用者の特性の理解と適切な福祉サービスの充実など、主体的な取組ができるように指導してきた。次年度も継続していききたい。

4 資料

(1) 会議等の種類

会議名	実施回数	対象	主な目的・内容
職員会議	年12回	職員全員	経営方針、職務分掌等円滑な運営のための会議 商品開発、経営戦略に関する会議
ケース会議	年12回	職員全員	個々のケースについて実態の把握と支援内容・方法を共有する会議
企画会議	年12回	職員全員	商品開発や販路拡大、イベント等の企画等に関する会議
調整会議	年6回	施設長・主任 関係職員	サポートハウスと連携を図り、利用者の生活支援や課題解決について協議する会議
自治会	年12回	利用者全員	利用者の自治活動と運営方針・行事計画の伝達
食に関する 検討会	年12回	施設長・主任 関係者	利用者の食の安全と食生活の向上のための会議

(2) 各種調査

調査名	実施回数	対象	主な目的・内容
嗜好調査	年2回	利用者全員	嗜好調査の結果を献立や偏食改善の資料とする
アンケート	年1回	利用者全員	サービス向上のための調査

(3) 実習生、ボランティアの受け入れ対応

	実績	対象	主な目的・内容
現場実習生	118人	特別支援学校高等部	進路決定、施設PR、地域貢献
見学者	165人	一般	理解啓発、施設紹介、進路選考、地域交流
ボランティア	0人	中学生以上	開かれた施設づくり、障害者理解の推進
大学等の実習	73人	資格取得希望者	後継者育成、施設の社会的役割
職場体験	18人	中学生・高校生	障害者理解、後継者育成、地域貢献

(4) 地域貢献・地域交流

	実績	対象	主な目的・内容
地域交流等	年0回	一般市民	ウィズフェスタ、県・市福祉協会主催の行事参加、県・市スポーツ大会、駅伝大会、特別支援学校の文化祭への参加
地域貢献等	夏季休業中	特別支援 学校生	特別支援学校生の夏季休業における体験利用の案内
公益的活動	年16回	生活困窮者	制度の狭間にいる生活困窮者に対し、サポートハウスと連携して食事提供等の支援を行う

(5) 研修（事業所内での研修及び事業者が派遣する外部研修）

研修名	分野	主な目的・内容
職員研修	支援・サービス	(10回) 支援技術の向上、職員の資質向上等に関する研修
外部研修	福祉・生産	就労支援や生産活動、新制度等に関する研修
職場見学	利用者就職	(2回) 利用者における就労意欲を高め、就職に必要な意識・能力などを向上させるための利用者研修

(6) 人材育成

資格名	取得数	主な目的・内容
福祉資格等	1人	強度行動障害研修
専門資格等	1人	調理師

(7) その他

事業名	令和2年度 来客数	令和2年度 目標数
ホクレア	1,500人	3,500人
プメハナ	9,900人	15,200人

# 令和2年度 サポートハウス 事業報告

## 1 施設（事業所）総括

### (1) 本体事業について

サポートハウスは、地域生活を希望する利用者のための「生活の場」として開所してから10年が経過している。現在、サポートハウスⅡ6か所、セルフサポートハウス5か所の計11か所、鹿児島市南部の谷山地区、坂之上地区で運営している。ハウス定員は78名で共同生活援助事業所として運営している。また、ショートステイとして3ハウス（谷山中央通、谷山東麓、坂之上向原）も併せて運営している。

夜勤の世話人を配置し、サビ管・支援員が一体となって利用者の自立に向け、基本的な生活習慣の確立や社会生活に必要なルール、マナー、知識、行動様式の習得に重点を置き利用者へ寄り添った支援に努めている。

今年度は、毎月1回支援会議を開催している。施設長、サビ管、日中支援員、各ハウス代表の世話人（夜勤者）が参加し、気になる利用者に対し、利用者が抱える問題点や課題等について検討し、対応策を話し合い、支援の方針を決めて、支援の充実を図っている。

南部地区事業所「しろやまの風」及び「ウイズ」に通う利用者に対しては、各事業所交互に支援方法について早期にかつ適切に対応できるよう情報交換を行っている。今後さらに連携を深め充実させていく必要がある。

各ハウスは、地域社会の一員として地域に根差した生活を送れるよう各町内会に所属しており、地域行事等に積極的に参加するよう促している。今後も更に地域の清掃活動や奉仕活動などの地域行事に積極的に参加するようにして地域貢献に努め、地域から親しまれる信頼されるサポートハウスを目指していきたい。

### (2) 付帯事業等について

#### ① 自立生活援助事業

ハウス付帯の新規事業として、自立生活援助事業に取り組んでいる。グループホームを退去された利用者が慣れない地域での生活に不安や困難なことはないか、月に数回以上自宅を訪問して、地域での生活に適応できるように支援を行うサービスである。今年度は2名の契約者があり、地域での生活支援を行っている。

#### ② 短期入所

坂之上向原、谷山中央通り、谷山東麓、各1名で6年目に入りより充実したサービス提供に努めたい。

## 2 中・長期計画（戦略スケジュール）の進捗状況

### (1) 利用者本位の福祉サービス

#### ア 心の通い合う支援サービスづくり

気になる利用者の現状把握および適切な支援のために施設長・サビ管、支援員・世話人による合同の支援会議（ケース会議）を毎月開催し、6ヶ月毎の個別支援計画の見直しの参考にもなり、支援技術の向上につながっている。今後も更なる支援サービスの質とスキルアップに向けた取り組みを図っていく必要がある。

#### イ 安心・安全で快適な環境づくり

毎月25日を施設設備の安全点検日と設定して、徹底した点検を行い未然の事故・防止に努めている。また、利用者や世話人・支援員による非常災害等に対する計画的な避難訓練も実施するなど安全には特に配慮している。住環境づくりとしての緑化・美化についても利用者や職員と一緒に取り組んでいる。

(2) 時代を担う専門性豊かな人材の育成

支援員・世話人全員が共同生活援助事業の内容を十分理解し、サービス質の向上に努めることを目指している。今後も研修をさらに充実させ、ハウス運営に参画意識を持った職員を育成していきたい。

(3) 地域のニーズに即応した法人経営・ネットワークで結ぶ福祉サービス

ア 幅広いニーズに対応した多様な事業の展開

地域公益活動として行政や警察等からの相談を受けた生活困窮者等支援としてレスキューハウスの役割を十分に果たせたと言える。支援の対象者は様々で再出発への踏み出す手助け支援ができたことは一定の成果である。今後も行政や警察等からの相談に対しては積極的な取り組みをしていきたい。

イ 新たな拠点作りと事業の展開

ハウス付帯の新規事業として、今年度より自立生活援助事業に取り組んでいる。この事業の趣旨を十分理解の上で新年度も取り組んでいきたい。

3 施設が重点的に取り組んだもの

(1) 本体事業について

ア 支援会議

昨年度から支援会議を実施しており、各ハウスで気になる利用者について、サビ管、日中支援員や世話人等から貴重な意見を出していただき協議して、今後の対応策を出し、支援の充実を図っている。毎回6～7名の利用者について検討がなされているが、具体的な支援策や支援方針が出されるので、各ハウスでの支援生かされている。また、参加者全員で事例をもとに考えることにより、世話人の資質向上と他のハウスの状況を知る良い機会となっている。

イ 利用者確保

サポートハウスは入居、退所が比較的多く見られ、本年度は一般就労者の利用者が様々な理由（離職、結婚、会社の近くに転居等）で退所することとなった。令和2年度は新しい利用者が5名ほど入居予定でハウス内の充足率を100%に維持することが課題となっている。ウイズやしろやまの風との連携を深めて利用者確保に努めたい。

(2) 付帯事業等について

地域公益活動として生活困窮者等への支援の実施

平成28年11月から地域公益活動として生活困窮者等への支援を行っている。今年度も16名の方に短期間ではあるが、食事とセルフサポートハウスの1室の提供を行うことができた。状況を十分に把握した上で受け入れており、常盤会の生活困窮者等への自立支援事業は徐々に関係機関に認知されつつある。また、利用された方はその後、自立した生活を過ごされている。

①受け入れ期間 平成31年4月1日～令和3年3月31日

②受け入れ総数 男性5件 女性11件 計16件

受け入れ理由 生活困窮者 11件（男性5件、女性6件）、  
DV5件（女性）、ハラスメント0件

③主な相談先 警察署（生活安全課）、鹿児島市生活保護課、鹿児島市福祉事務所、鹿児島市障害者基幹相談支援センター他

④主な支援内容 住居提供及び食事提供（夕食、朝食のみ）

## (1) 会議等

会議名	実施目標	対象	主な目的・内容
支援会議	年12回	世話人、サビ管、日中支援員、世話人	特に気になる利用者の支援についての検討
職員会議	年12回	サビ管、世話人・支援員(通所事業所職員)	事故やヒヤリハット報告、月行事・施設外活動等の確認、研修会・各種会議への参加報告
個別支援計画見直し会議	年12回(各GH)	サビ管、支援員、世話人	利用者の個別支援計画作成におけるモニタリング及び原案に対する検証・見直し
調整会議	年12回(ウイズ、しろやま)	施設長・主任各ハウス代表	事業所を超えたハウス内の課題解決について協議する会議

## (2) 各種調査

調査名	実施目標	対象	主な目的・内容
アンケート	年1回	利用者全員	「住居での生活の現状と将来の生活設計について」

## (3) 見学者、ボランティアの受け入れ対応

	目標数	対象	主な目的・内容
見学者	30人	学校生・一般	GHや法人の取組への理解
体験入所	30人	入居検討者	GHでの生活の実地体験

## (4) 地域貢献・地域交流

	実施目標	対象	主な目的・内容
地域交流	年6回	地域住民	谷山ふるさと祭りや地域の夏祭り、運動会などに参加し、町内会との交流を通して施設や利用者への理解・啓発
地域貢献	年6回	地域住民	廃品回収や清掃活動を通しての地域貢献
その他の交流	年20回	既存会員	地域スポーツクラブへの加入し練習や試合への参加 競技種目(サッカー、バドミントン、バスケットボール、卓球)

※ 地域公益活動(かごしまおもいやりネットワーク事業への参加)

生活困窮者やDV被害者への住居の無償提供

## (5) 研修(事業所内での研修及び事業者が派遣する外部研修)

	実施目標	対象	主な目的・内容
GH内研修	年7回	サビ管、日中支援員、世話人	支援技術や生活指導についての意思統一と支援スキルアップのための研修。社会福祉制度や個別支援計画策定のプロセスなどに関する研修
外部研修	年10回	全職員の中から人選	社協、知協、行政などが実施するGH、社会福祉に関連する研修に職員を積極的な派遣

## (6) 人材育成

資格名	分野	目標	主な目的・内容
介護職員専門員	制度	0人	資格取得

# 令和2年度 しろやまの風 事業報告

## 1 施設総括

令和2年度は、しろやまの風の特徴である「しろやまSTYLE」の充実化を昨年度に引き続き掲げ、利用者個々に応じたコース編成の見直しと送迎の効率化などの支援、サービス内容面の強化と共に、各種会議の効率的運営、および職員個々における支援技術のスキル向上、働き方改革に伴う業務の効率化など施設の運営面に至るまで、「しろやまの風らしさ」の構築を継続した年であった。

また、児童関係では放課後等デイサービスガイドラインに沿った運営に取り組み、職員自己評価および保護者等アンケートの結果を踏まえた施設運営と、家族支援等にも必要に応じて改善を図った。

なお、今年度は放課後等デイ利用の児童が二階のトイレ窓から飛び降りて大腿骨を骨折するという大きな事故が発生してしまった。危機管理体制を再度見直し、危険箇所への防止柵の設置や日常点検の徹底を行った。今後も、更なる「しろやまSTYLE」の確立と充実化を図る事により、利用者の意思決定を尊重した更なるサービスの提供および安全管理面の徹底等、ハード面を含めた質の向上に繋がるよう取り組んでいきたいと考えている。

## 2 中・長期計画（戦略スケジュール）の進捗状況

### (1) 利用者本位の福祉サービス

ア・「しろやまSTYLE」の一環として生活介護事業利用者の特性や個性を尊重し、ご本人・家族の意向を反映し、特性に合わせたコース変更および働く事への関心の高い方に対して、就労継続支援B型に新しくミドルコースを開設し、段階を踏まえた移行にも取り組んだ。その成果として、利用者の特性や個々の目標に合わせた活動設定や環境の提供が可能となり、利用者の情緒安定や意欲にも繋がった。

- ・放課後等デイサービスでは、前年度から引き続き利用者の年齢層と活動内容に合わせた小グループ化編成を行い、取り組みやすい環境での活動の充実を図った。
  - ・利用者が食事を楽しめるように、食堂のレイアウトやテーブル配置等の工夫を行い、障害特性に合わせた個別の食事スペース等やメニューの絵カード等使用による視覚的構造化を継続し、落ち着いた環境で食事が摂れるように配慮した。
  - ・就労継続支援B型で行っているメンテナンス・パソコン作業・ウエス作業も軌道に乗り、各利用者の個性や作業能力に合った作業種目を提供する事ができたが、新型コロナの影響により外部からの発注数がかなり減少し、収入面においては伸び悩む所が大きかった。
  - ・延長支援では安定したサービスの提供が可能となっており、両親共働きという家庭も多く、利用希望者も増えてきており、更なるサービスの質の向上に向けてプログラム内容の充実を図る為に、内容を再検討し支援に取り組んだ。
  - ・家族会については、毎年事業所説明会を年2回実施していたが、今年度は新型コロナの影響で蜜を避けるという環境下で開催ができなかった。
- イ・送迎バスの運行におけるバスターミナル化を推進し、利用者・家族に向けた説明会を開き、児童においてはステーションの見直しを行い、バス運行のコンパクト化を図った結果、年間を通しての車両事故件数の減少にも繋がっている。

- ウ・令和2年2月に第3回目の第三者評価を受審。今後、評価結果に準じた改善項目の検証と、次回の受審に向けた改善計画や資料作成を今後も取り組んでいく。
- ・放課後等デイサービスガイドラインに則した自己評価を実施。評価結果をホームページへ公開した。

## (2) 時代を担う専門性豊かな人材の育成

- ア・より良い施設運営や利用者支援の向上を図る為に会議を見直し、月2回を基準とした企画運営会議を実施し、事業所の改善点やサービスの質の向上に向けた取り組みの方向性を確認した。
- ・月1回実施している事業所内研修では、「支援実践・支援理論・支援技術・危機管理」を主とした経験年数による研修と、法人内での定期的な新任職員、中途職員研修会へも出会い、職員のスキルアップに努めた。
- ・利用者支援の強化を目的に、施設内で「実践事例報告会」を11月に実施。それぞれの部署で実践した支援方法とその結果を報告して情報共有を図った。南部の実践事例報告会は、コロナ禍で開催できなかった。
- ・資格取得においても日々の努力が実を結び、国家資格の社会福祉士に1名が合格した。

## (3) 地域のニーズに即応した法人経営・ネットワークで結ぶ福祉サービス

- ア・ボランティア受入については、コロナ禍で希望者も少なかったが、感染リスクを配慮した取り組みを実施した。
- ・木屋宇都地区の町内会活動（清掃活動）へ参加することで、情報交換の場にも繋がった。
- ・「地域交流 in しろやま」は毎年、地域住民の方々の協力を得ながら、地域と施設利用者の交流の機会を設けていたが、コロナ禍により中止となり、地域の方々より来年は開催できることを期待しているという意見もいただいた。
- イ・かごしま南ネットや特別支援学校（学級）との意見交換会や、状況に応じて他事業所との担当者会議等に参加し、連携を深めると共に、利用者個々における情報共有を図ることができた。

## 3 令和2年度に重点的に取り組んだこと

- ・「しろやま STYLE」をテーマとした、しろやまの風の特徴を活かした活動提供の充実。
- ・送迎時における誘導職員配置による安全誘導と、安全運転業務の遂行。
- ・ご家族との連絡体制の充実（連絡帳の効果的な活用）
- ・第三者評価受審結果に基づく自己評価結果と改善計画と資料の作成。
- ・新型コロナウイルスおよび感染症に対する感染拡大防止対策の徹底。
- ・専門職種参加型による個別支援計画検討会議の充実と、意思決定を踏まえた計画作成。
- ・効果的な職員育成（OJT）の検討と実践。

5 数値実績

(1) 会議等

会議名	実績数	対象	主な目的・内容
職員会議	年3回	職員全員	経営方針への参加、職務分掌の周知、年間反省異動発表等
ケース会議	12回	職員全員	個々のケースについて実態の把握と支援内容、方法を共有する会議
企画運営会議	24回 (月2回)	施設長・副施設長 主任・チーフ	施設内の課題、困難事例の対応策検討、支援内容充実、施設の自己評価と分析改善など
調整会議 合同調整会議	2ヶ月に1回 3ヶ月に1回	施設長・主任 部署代表	部門を超えた施設内の課題解決について協議する会議
食に関する 検討会	12回 (月1回)	施設長・主任 栄養士・委託業者・ 部署代表・利用者	よりよい食事提供のための会議
自治会	12回 (月1回)	利用者	利用者の自治活動と経営方針の伝達理解 意見・要望の収集

(2) 各種調査

調査名	実績数	対象	主な目的・内容
嗜好調査	2回	全員	嗜好調査の結果を献立や偏食改善の資料とする
アンケート調査 (QCサービス)	1回	利用者家族	サービス向上のための資料とする

(3) 実習生、ボランティアの受け入れ対応

	実績数	対象	主な目的・内容
大学、専門学校 高校の実習生	20人	資格・免許希望者	社会福祉士、介護福祉士、保育士 教員免許取得の為の介護等体験
ボランティア	0人	中学生以上	開かれた施設づくり・障害者理解の推進
見学者	14人	一般・民生委員・児童委員	利用希望者・地域交流・施設理解
現場実習・体験	53人	養護学校高等部等	進路決定・施設PR・地域貢献

(4) 地域貢献・地域交流

	実績数	対象	主な目的・内容
地域交流	0回	地域住民・ 利用者家族	町内会イベント参加、スポーツ大会、イオンレシートキャンペーン、地域交流INしろやまの風
地域貢献	1回	地域住民・ 利用者	清掃ボランティア、ペットボトルキャップ収集・寄贈 触法者の援助・支援

(5) 研修（事業所内での研修及び事業者が派遣する外部研修）

研修分野	主な目的・内容
保護者研修	保護者と共に課題を共有し、支援の在り方を学ぶ
新任職員研修	新任職員の育成、利用者・施設・業務理解の促進
施設職務研修	衛生管理、権利擁護、日常業務、社会資源、制度理解の促進
支援理論研修	視覚的構造化、障害特性に合わせた支援方法の理解
支援技術研修	コミュニケーション技術、介護技術、面談技術の獲得
事故防止研修	危険予知訓練（KYT）、運転技術向上、薬の副作用理解、リスクマネジメント
支援実践研修	支援成功事例の収集と、支援実践技術の獲得

(6) 人材育成

資格名	分野	実績	主な目的・内容
社会福祉士	制度	0人	資格取得
介護福祉士	制度	1人	資格取得
保育士	制度	0人	資格取得
精神保健福祉士	制度	1人	資格取得
中型免許	支援	0人	資格取得

# 令和2年度 いこいの丘 事業報告

## 1 施設総括

令和2度はコロナ禍であった為、職員・利用者共に感染予防に努め、施設で過ごす時間以外の本人の身体状況や行動の把握、又県外在住者との接触や家族の帰省の確認をこまめに行った。例年以上にご家族と連絡を取り合い、感染予防対策の啓発や情報の共有を行い協力いただいた1年となった。

利用者の方々も85歳以上が7割を占め、うち90歳以上が4名となっている。大腿骨を骨折のため入院手術後、在宅の生活が難しくなり特養に入所される方が1件あったが、利用者の身体状況や生活環境も安定しており、今年度は入院や入所等に移行するケースが少なかった。

近隣の居宅や医療機関からの問い合わせも多くなった。長寿あんしん相談センターの職員との関係性の構築も図れ、泊まりをメインにした受け入れは難しいが、通いや訪問を組み合わせるサービスを提供することに重きを置き2名の利用者をサービス利用に繋げ、登録定員18名に近づくことができた。多職種、他事業所との連携を図りながらサービスを提供することも多くなってきたので、職員一人一人が更に介護技術や知識を深め、サービスの質の向上に努められるよう取り組んでいくことが求められる。

また、今年度の事故や苦情を振り返り、危険箇所点検やサービスの見直しを行い利用者満足度が高められるよう、より一層の努力を重ねていきたいと思っております。

## 2 中・長期計画（戦略スケジュール）進捗状況

### (1) 利用者本位の福祉サービス

- ア・コロナ禍で、施設外活動の中止や日頃の活動の見直しを迫られたが、コロナ感染予防に努めながら、利用者を楽しんでもらえる活動を模索し工夫を凝らした活動の提供を行う事ができた。
  - ・在宅生活を維持していくうえで、定期的にPDCAサイクルを行い支援の見直しを行った。
- イ・送迎時の検温・消毒、来所時の手洗い・消毒の徹底を行った。事業所内では朝・夕の掃除、消毒を行い、感染予防に努めた。
  - ・今年度は車両事故を半年間で2件も起こし、同じルート上での事故であったため、送迎ルートの見直しと危険箇所の洗い出しを行った。
  - ・入浴に関連する行政報告事故が転倒、ヒートショックの2件が発生したため、転倒防止マットの導入や、入浴時の職員配置の見直しを行い安全に十分に配慮した環境を整備した。ヒートショックに関しては危険性や症状、対応策の研修を行った。
- ウ・運営推進会議を奇数月の第3木曜日に設定しているが、コロナ禍のため今年度は1度も開催することができなかった。会議は中止にはなったが、委員の方々には報告資料等を配布し電話やメール等を利用し、ご助言をいただいた。
  - ・サービスの評価も計画的に取り組むことによって、関係各機関への提出やホームページへの掲載を速やかに行うことができた。

### (2) 時代を担う専門性豊かな人材の育成

- ア・支援実践事例報告会に向けて、早い段階で対象者を設定し構想を練ることができたが、形にするまでに予想以上に時間を要してしまった。南部実践事例報告会は中止となったが、施設内研修で報告を行い、しろやまの風と一緒に開催することで、障害分野のサービスの支援方法と介護分野での支援を共通理解することができた。
  - ・外部研修に出席する機会は少なかったが、事業所内での研修を充実させ独自の研修スタイルでスキルアップの機会を作った。

(3) 地域のニーズに即応した法人経営・ネットワークで結ぶ福祉サービス

- ア・定期的に長寿あんしん相談センターに連絡を入れ、又利用者の通院支援の際に地域連携室等に挨拶に行き情報収集や事業所の登録定員の空き状況等を報告し、利用者確保に向けて積極的に働きかけることができた。結果2名の新規利用者をサービスに繋げることができた。
- ・町内会活動は年1回の清掃活動に参加することしかできなかったが、地域の方々からの要望や施設に対しての期待などの声を直接聞くことができ交流の場となった。
- ・「地域交流inしろやま」はコロナ禍で中止となり、民生委員児童委員、町内会会長、地域の世話役の方からは、「コロナが落ち着いたらまた開催して欲しい」と要望をいただく。

3 令和2年度に重点的に取り組んだこと

- ・新型コロナウイルス及びその他感染症の感染拡大防止対策の徹底
- ・感染症対策のための掃除、消毒の徹底
- ・新規利用者確保
- ・利用者の継続利用を図るための訪問強化と体調不良時の早めの受診
- ・外部評価への計画的取り組み
- ・利用者の主治医との連携強化
- ・職員間の情報共有（朝・夕のミーティング）
- ・多職種や他事業所との連携強化
- ・ご家族との情報共有の為のツールの拡大

## (1) 会議等

会議名	実施回数	参加者	主な目的・内容
職員会議	3回 4・10・3月	職員全員	経営方針への参加、職務分掌の周知、月行事、活動等の調整等
ケース会議	24回 (月2回)	職員全員	個々のケースについて実態の把握と支援内容、方法を共有する会議
食に関する検討会	12回 (月1回)	施設長・主任 栄養士・委託業者 部署代表・利用者	よりよい食事提供のための会議
運営推進会議	0回 (奇数月)	理事長・施設長・有識者・地域住民・利用者	提供しているサービスの内容等を明らかにすることでサービスの質の確保を図る為の会議（外部評価実施） ※コロナウィルスの影響により今年度は中止

## (2) 各種調査

調査名	実施回数	参加者	主な目的・内容
嗜好調査	2回	全 員	嗜好調査の結果を献立や偏食改善の資料とする
アンケート調査 (QCサービス)	1回	利用者家族	サービス向上のための資料とする

## (3) 実習生、ボランティアの受け入れ対応

	受入人数	参加者	主な目的・内容
大学、専門学校 高校の実習生	0人	資格・免許・海外研修生	社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員、福祉研修教員免許取得の為の介護等体験
ボランティア 見学者	0人 5人	中学生以上 一般・民生委員・児童委員	開かれた施設づくり・障害者理解の推進 利用希望者・地域交流・施設理解
職場体験	0人	中学生・高校生	障害者・認知症高齢者理解・後継者育成

## (4) 地域貢献・地域交流

	実施回数	対象	主な目的・内容
地域交流	0回	地域住民・利用者家族	町内会イベント参加、地域ケア会議、町内会総会参加、スポーツ交流会・町内会グランドゴルフ大会（1回）
地域貢献	1回	地域住民・利用者	清掃ボランティア（雨天中止）・介護相談

## (5) 研 修（事業所内での研修及び事業者が派遣する外部研修）

研修分野	参加人数 回数	主な内容
多職種連携会議	0回	包括ケアシステムの構築
地域ケア会議	2回	困難事例へのアプローチ
小規模多機能ホーム連絡会	0回	地域福祉の資質向上
法人内研修	2回	職員の資質・専門性の向上
施設内研修（全員参加）	1 2回	職員の資質・専門性の向上
ケース会議（全員参加）	2 4回	認知症の理解・専門性の向上

## (6) 人材育成

社会福祉士	0人	資格取得
介護支援専門員	0人	資格取得
介護福祉士	0人	資格取得

# 令和2年度 ときわの丘 事業報告

## 1 施設総括

令和2年2月1日に開所して、スタッフ10名で受け入れの準備をスタートした。いしき園からの入所者の受け入れを18日から3回に分けて実施し、合計25名、平均年齢70歳の入所者でスタートであった。スタッフは救護施設での経験がないため当初は不安の連続であったが、課題が出るたびに対応策を協議し、全員で解決策を模索しながら日々の業務に臨んでいた。一つ一つが手探り状態の中でもがきながら見出してきた方法は、そのまま経験値として職員のスキルとなっていったと考える。

これまで全く未知のコロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、入所者の保護にも慎重にならざるを得ない状況の中で、出来得る限りの感染症対策を取りながら各福祉事務所からの依頼に対応してきたが、入所に際してコロナウイルス感染症が大きな障害になったことは否めないことであった。

生活困窮者の態様も大都市圏とは趣を異にしており、鹿児島県の場合は高齢者の割合が非常に高いことが判明した。一人暮らしができなくなったということが最も多い入所依頼の理由である。残存能力を維持するために活動の内容を工夫した取り組みを行いながら対応してきたが、入院からそのまま高齢者施設へ移行された方も増えている。開所以来19名の入所があったが、退所も10名あった。この状況は、この先暫くは続きそうであるが、福祉事務所以外の病院を含めた関係機関との連携も広がってきているので、入所者の確保に繋げていかなければならないと考えている。

建物の不具合も多々あった。特に梅雨時期に発生した雨漏りはなかなか改善せず、大きな補修工事を行いどうにか収まっている状況である。今年の梅雨時期を乗り切れたら大丈夫だろうと思うが、今後も業者と連携を密に取りながら対応を図る必要がある。

## 2 中・長期計画（戦略スケジュール）の進捗状況

### (1) 利用者本位の福祉サービス

#### ア 利用者本位の福祉サービス

- ・ 生活に困窮し自立した生活が難しい状況の中で生きている方々に、安心と安らぎの場を提供すべく入所者の権利擁護を遵守しながら日々の活動を支援してきた。
- ・ 入所者の特性や個性に合わせた活動環境を提供し、情緒の安定や意欲付けを図った。
- ・ 社会復帰に向けた仕事に対する意欲付けのためウエス作業を取り入れたが、コロナウイルス感染症のため材料の入手が困難になり活動が滞ってしまった。

#### イ コロナウイルス感染症対応

- ・ 入所者が食事を楽しめるように、飛沫防止対策として食堂のテーブルに仕切り版を設置し、落ち着いた環境で食事がとれるようにした。
- ・ 家族の面会については、感染症対策を最大限施し、短時間で少ない人数、広い空間での実施により入所者・家族双方の心の安定を図ることができた。
- ・ 入所者一人ひとりに布製マスクや不織布マスクを配布し、施設内でも着用を推奨して感染症予防に取り組んだ。

また、必要な場所への空気清浄機や消毒液の設置、一日3回の検温を実施することにより、感染症予防に努めた。

(2) 時代を担う専門性豊かな人材の育成

ア 会議等

- ・ より良い施設運営や利用者支援の向上を図る為に、毎日16時から短時間の度引き継ぎとして、入所者の状態確認や事業所の取り組みの方向性を確認した。
- ・ 救護施設の外部専門家を要請して研修を実施する予定であったが、コロナウイルス感染のため開催できなかった。職員を講師に「支援実践・支援理論・支援技術・危機管理」を主とし、職員のスキルアップに努めた。

(3) 地域のニーズに即応した法人経営・ネットワークで結ぶ福祉サービス

ア 地域貢献

- ・ 触法（障害者）の社会復帰に向けたボランティア受入については依頼がない状況である。
- ・ 木屋宇都地区の町内会活動（清掃活動）へ参加し、地域の中の事業所としての役割を担った。
- ・ しろやまの風・いこいの丘で例年開催している「地域交流 in しろやま」に参加する予定であったが、こちらもコロナウイルス感染症のため中止となった。

イ 情報提供

- ・ 鹿児島国際大学の学生さんにリモートでの施設紹介を実施し、事業所の意義や内容について情報を発信することができた。

3 令和2年度に重点的に取り組んだこと

- ・ 県内初民間救護施設として関係機関への周知活動と協力体制の構築
- ・ 50名定員確保の取り組み
- ・ 救護施設職員としての自覚の徹底
- ・ 初めての公的監査に対する対応策
- ・ 入所者同士のコミュニケーションの醸成
- ・ コロナ感染症予防対策の徹底
- ・ 敷地内環境整備（ヤンバルトサカヤスデ駆除）
- ・ 個別支援計画の充実